

**ムーンショット型研究開発制度に係る戦略推進会議（第四回）
議事概要（ポイント）**

1. 日 時： 令和4年3月11日（金） 13：00～16：25
2. 場 所： 中央合同庁舎第8号館6階623会議室（ウェブ会議）
3. 議 題： 目標1～6に関する進捗・自己評価の報告

構成員からの主なコメント

[国際的なベンチマークと体制の柔軟な見直し]

- 国際競争が激化する中で、世界的に進んでいるものは取り込んでいかななくてはならない。現時点の計画を柔軟に変更していく体制や仕組みをもつことが必要だ。最初の計画に縛られてしまうと、世界の潮流に乗り遅れる。
- 国際的なベンチマークをよく見ることが重要だ。その中で、各プロジェクトがどのレベルにあるのかを常に把握し、どこを目指すのかをはっきりさせること。海外との比較を分かりやすく説明することも必要。
- 世界でも日本でも、ベンチャー企業がすでに取り組んでいる分野もある。それと比べて、ムーンショットにはどういう特徴があってどのような部分を伸ばそうとしているのか。
- 世界の動向把握、我が国の強み弱み、企業の動きをウォッチする体制を作ることも必要。

[産業界との連携、社会実装、スタートアップ]

- 社会実装はムーンショットの大きなテーマである。研究開始当初から、社会実装や産業政策への位置づけを見据えて研究開発を行うことが必要。
- （特に目標2）例えば、データベースの作成については莫大な予算と人が必要。ムーンショットは最長でも10年間で終わってしまうので、その後を見据え、産業界から資金を調達するなど長期的な戦略や工夫が必要。
- （特に目標2）産業界との関わりを知りたい。目標2については、数理モデルでIT企業がソフト・ハードともに強いのだが、IT企業との今後の連携を知りたい。SIPのバイオ系課題でも未病や糖尿病がある。企業もたくさん入ってきているので、類似のテーマについてはSIPの企業との連携も考えられる。
- CSTIでスタートアップの議論をしており、ディープテック系のスタートアップが重要としているが、MSとは親和性がある。ぜひともスタートアップにつなげてほしい。

- （特に目標 4）高コストな研究開発に関して、2050 年に向けて解決できるというシナリオを描いてもらえると産業界も入りやすい。
- 成果をスタートアップにつなげるために何をすべきか検討が必要。

〔目標間や他事業との連携〕

- 例えば、目標 1 と 3 など、相互に関連する研究は、横断的な意見交換などが必要ではないか。
- （特に目標 4）JST 未来社会事業の中にも似たようなテーマがあるので、連携も期待できる。
- 複数省庁や複数 FA にまたがる連携も必要。

〔対外発信強化〕

- 長期間で自由度が高いということで、ベンチマークを定めてやっていないのはいかという謂れのない批判を聞いたことがあるが、本日の説明を聞いて、想像以上に進捗しており驚いている。ぜひとも広報だけでなくテクノロジーレジディネスレベルのところでも対外発信してほしい。
- 研究者目線ではなく、国民ひとりひとりが分かりやすい成果の公表が必要。

〔国際連携〕

- （特に目標 4）経済合理性がない状態での産業界や国際的な連携をどう考えるか。
- 国際連携も非常に重要なテーマであるが、現状、十分に進んでいないと聞こえてくるので活発化を。

ムーンショット型研究開発制度に係る戦略推進会議（第五回）
議事概要（ポイント）

1. 日 時： 令和4年3月23日（木） 13：00～15：45
2. 場 所： 中央合同庁舎第8号館6階623会議室（ウェブ会議）
3. 議 題： 新目標8・9に関する研究開発の進め方

構成員からの主なコメント

[新目標8に関して]

- 非常に夢のあるテーマである。海外でも同様の研究があるのであれば、海外との連携は重要。
- S I Pで防災関係のプロジェクトがあり、ゲリラ豪雨や線状降水帯に関する研究も行っているので、お互いが情報交換できる仕組みを作って頂きたい。
- I P C Cレポートにもあるように、海外では気象の変化が人の健康にどういう影響があるかを調査・予測しているので、そのような観点も必要。
- ポートフォリオはよく考えられている。このテーマは競争より協調ではないか。今までバラバラで研究をやっていた人たちを束ねるP Dのマネジメントは大変だが、そこが非常に重要。自分なら毎日P Mとミーティングを行うところであり、十分に意思疎通を図ってワンチームで研究を進めていってほしい。
- 気象はいろんなマーケットと直結するものである。標準化を視野に入れることが必要。

[新目標9に関して]

- 広く国民から理解が得られるよう、工夫と、丁寧な説明が必要。E L S I を重視しているというだけでは不十分だと思う。
- 医学と人文社会科学とのボーダーで苦勞することがある。例えば外科治療においても患者にQ O Lの質問をするようなアプローチが試みられているように、本研究においても医学的な観点も入れることが重要。
- 5年後ステージゲートのイメージを明確にすることが必要。何を達成すれば突破できるのかなど、ある種の指標が必要。
- 同種の研究に関して、米国やアジアなど、地域によって考え方が異なる。海外の

動向・情報を入手し、国際連携を検討する際には留意が必要。

- この研究が進んで具体化してくると、企業としても有益な情報が集まると思う。ぜひとも企業と連携し、企業文化も変えて欲しい。
- 文理融合で多様なバックグラウンドの方が集まっており期待している。一方で多様であるが故に、共通的なキーワードや指標が必要になってくる。
- スタート時点では要素技術開発の研究が多い印象。E L S I も含めて、その技術をどう評価していくのかを考えていくことが必要。ここがまさにP Dの仕事の難しい部分になる。
- 採択された研究者の横の連携が重要。そこをしっかりとって頂きたい。